



清 泉

令和7年12月25日
昭島市立清泉中学校
校長 佐藤 晴美

昭島市立清泉中学校 〒196-0024 昭島市宮沢町1-9-1

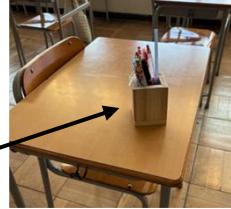
電話042-541-0762 FAX042-541-6869 <http://www.city.akishima.ed.jp/~seisen/>

学びは生活と結びついて、生きて働くものとなる

技術の授業で学習した「けがき」ということばを覚えていらっしゃいますか？

「さしがね」はどうでしょうか。今学期、1年生はさしがねの使い方を学習した後、1枚の板にけがきをする。のこぎりの正しい（安全な）使い方を知り、実践。製作物のパーツを切り落としていく。組み立てた後、より滑らかで美しい自分のペン立てとなるよう、自分なりにやすりを選びながら磨いていく。授業はそこまでです。

では、その後、そのペン立てはどうなったのでしょうか。こうなりました。



来年1月に実施する1年生はスキー移動教室の準備を始めるにあたり、私から1年生に2つ質問をしました。「1：秋に実施した多摩フィールドワークの経験から自慢できる成果は何か」「2：多摩フィールドワークで『知らない』が『分かった』に変わったことや、失敗から学んだ（成長したこと）は何か」どのクラスもよく考えられましたが、少しだけ生徒の回答を紹介します。

【自慢できる成果】みんなで協力したこと・5分前行動完璧！・友達と笑って過ごせたこと・その場で自然と班員と役割分担したこと

【学んだ、成長した】最初時間に送れたが、そのことをきっかけにそれまで以上に時間管理をするようになった・仲間といふと楽しい班の人と意見が分かれても対応しようと意識すると何とかなること・陰でいろいろな人が自分たちのために動いてくれていること・最初は嫌だと思っていたこともやってみれば意外と楽しめることができた

こんな回答もありました。「家で作っている焼きそばの作り方を焼きそばづくりに役立てられたこと」、「料理の難しさと楽しさを知った」。家庭で日々実践している生徒にとっては自慢（得意なこと）となり、今回の調理経験が新鮮なものであった生徒は家庭で「ご飯を作ってみよう」という意欲へとつながったことでしょう。

もう一つ。現在、3年生の面接練習をしています。その中で「高校卒業後の進路をどのように考えていますか」と質問したとき、ある生徒がこう言いました。「父が●●の仕事をしています。その姿にあこがれています。そのため大学か専門学校に進学して知識や技能を身に付け、自分もその職業に就きたいと考えています」と。

先日、ある会合に参加してきました。その時に紹介・配布された小さな冊子がありました。それは「能登半島地震から1年 未来へつむぐ親子の手紙」（令和7年1月）というタイトルでした。この冊子は、石川県教育委員会の心の教育推進協議会と石川県PTA連合会が作成されたものです。その中のある親子の手紙のやりとりをどうしてもみなさんにお伝えしたくなり、石川県教育委員会の担当部に確認し、清泉中の学校便りへの掲載許可を得てここに掲載いたします。

ありがとう。

避難できたらよ。

くれていたから落ち着いて

母さんが手をつないで

あの時、すごく怖かったけど、

めちゃくちゃ焦った。

津波警報が鳴り響いて、

立てる程の揺れの後、

正月の能登半島地震、

立ちくちゃ立たない

必要などきは言ってね。

母

いつでも母さんのぬくもりが

大きくなつたけど、

何歳になっても子供だよ。

母さんよりも

久々に繋いだ君の手は

無意識に手を繋いだ。

大地震と津波という状況下、

人の温もりって安心するよね。

能登半島地震からもうすぐで2年が経とうとしています。被災地では今なお200路線の道路が不通の状況だそうです。被災地の方々は震災のことが世間の記憶から薄らいでしまうことに不安を感じいらっしゃいます。私たちは被災地に思いを馳せるとともに、学ぶことが大切なではないでしょうか。そして、改めて、1つ1つ私たちができるを考え、行動していくべきだと思うのです。

そして、中学生の時期、家庭よりも友達など外の世界とのつながりを意識する時期でもあります。でも、やっぱり子どもたちの心を支えるのは家庭や育った地域での人と人との「ぬくもり」だと思うのです。

令和7年も清泉中は、保護者・地域のみなさまに支えていただきました。来年もどうぞよろしくお願いいたします。